

Title	支那語研究舎の変遷及びその実態： 支那語研究舎から北京同学会語学校までを中心として
Sub Title	The development and the circumstances of Shinago Kenkyusha : from Shinago Kenkyusha to Peking Dogakukai Language School
Author	黄, 漢青(Huang, Hanqing)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.39 (2007.) ,p.163- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20071220-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

支那語研究舎の変遷及びその実態

——支那語研究舎から北京同学会語学校までを中心として——

黄 漢 青

はじめに

支那語研究舎は、1903年8月、北京で日本人を対象として創設された中国語学校である。1895年4月に日清戦争が終結した後、1904年2月日露戦争開戦までの約10年間、日本ではかつてないほど国民の中国への関心が高まり¹⁾、内外にわたりいくつもの中国語教育機構が設立されたが、この学校はその一つである。支那語研究舎は、時代の変化に応じて1905年に清語同学会と改称、1912年に大日本支那語同学会と改称、1925年に北京同学会語学校と改称、1939年に北京興亜学院と改称、1944年に北京経済専門学校と改称される。そして42年間の長きに亘って存続した後、1945年日本の敗戦とともに歴史から姿を消した。したがって、明治時代に誕生し、昭和時代の敗戦までずっと存続した支那語研究舎は、北京における最長の歴史を有する日本人対象の中国語教育機関である²⁾。

本稿では、紙幅の関係から、支那語研究舎42年間の歴史をすべて網羅するのは不可能であるため、論じる対象を、支那語研究舎、清語同学会、大日本支那語同学会、北京同学会語学校に限定し、北京興亜学院、北京経済専門学校については、別稿にて論ずることとする。支那語研究舎、清語同学会、大日本支那語同学会、北京同学会語学校について論じたものとしては、那須清「支那語研究舎——北京にあった無名の中国語学校」(『北九州大学外国語学部紀要』第61号、1987年)があり、那須清編『北京同学会の回想』(不二出版、1995年)には、これら諸学校に関する記録や回想が掲載されている。支那語研究舎の後身北京興亜学院の卒業生でもある那須清は、ほとんど顧みられることがなく、忘れ去られようとしていたこの語学学校に光を当て、基礎的な記録を残すことに大いに貢献した。本稿では、那須清の研究成果を踏まえうえて、那須清が言及していない支那語研究舎関連

史料も新たに加えて、諸関連資料を総合的に分析することにより、できればこの学校の変遷状況と実態についてのより詳細で正確な解明をおこなうことを目指したい。

一 支那語研究舎

支那語研究舎の創立動機はかなりユニークである。文部省の招聘に応じて来日し、1897年から1903年まで東京外国語学校や宮島大八が創設した善隣書院から独立した支那語学校などで中国語の講師をしていた金国璞は、1903年6月、北京に戻った。その時、ちょうど北京に在住していた元支那語学校校長代理の山本滝四郎と東京外国語学校の教え子上田三徳、古賀邦彦、林要五郎の四人が、金国璞への「養老報恩の麗しき精神の下に」、養老資金の調達を図るために発起人となり、1903年8月1日、支那語研究舎が誕生した³⁾。支那語研究舎は家塾によく使われる「舎」という称呼に相応しく、北京東單二条胡同にある金国璞の住居を兼用した⁴⁾。この状況は1905年11月まで2年以上続く⁵⁾。

この時期の学校組織は極めて単純であった。明確な責任者を置かず、校則もなかった。上田三徳、古賀邦彦、林要五郎が本業に従事しながら、支那語研究舎の事務を兼務し、金国璞が授業をおこなった。支那語研究舎の運営資金は、学生が納める授業料の他に、「賛助員」である京師大学堂教習⁶⁾ 服部宇之吉、日本駐北京公使館書記官鄭永邦、高等警務学堂監督川島浪速の3人を主とする寄付金で賄われた。内田康哉駐清国公使も支那語研究舎の創設に賛同し、時折寄付をした⁷⁾。授業は、在職学習者の便宜を図るため、夜間しかおこなわれなかった。仕事を持たない語学留学生は、昼、中国人を聘して個人授業を受け、夜、支那語研究舎に通った⁸⁾。その後、上田、林が北京から離れたため、研究舎は一時的に不振に陥り、在學生がわずか2、3名という時期もあったが⁹⁾、その後また持ち直し、20名以上に増えた。

二 清語同学会

1905年11月、支那語研究舎の所在地は、金国璞の自宅が窮屈になったため、西へ500メートルほど離れた小紗帽胡同東端に移転し¹⁰⁾、名称も清語同学会へと改称された¹¹⁾。また金国璞自宅付近には、清語同学会に通う学生の寄宿舎も設けられた¹²⁾。

支那語研究舎の「舎」から清語同学会の「会」への名称変更には、北京にある日本人居留民の組織名と統一するという意味合いも含まれていたと思われる。当時、北京で最も大

きな日本人組織は日本人会であり、会長は内田康哉駐清国公使自らが任じていた¹³⁾。その他に、学士会、仏教会、商工会、乙巳会、読書会、燕会、和不流会、二十一日会、燕塵会、初音会、婦人会、青年会など十数の「会」が存在していた。メンバーが重なっているものもあるが、各会はそれぞれ明確な趣旨を持ち、定期あるいは不定期の活動がおこなわれていた。どの「会」も、民間団体でありながら、日本公使館と密接的な関わりをもち、様々な形で公使館の支援を受け、公使館員もしばしば「会」の集いに参加した。したがって支那語研究舎から清語同学会への改名は、いままでの公使館との不即不離の曖昧な関係を変え、公使館と強い絆で結ばれた民間団体の系列に組み入れられたことを意味すると思われる。

清語同学会は、名称の変更に伴い、学校の組織も大きく変わった。評議員と幹事が新たに設けられ、清語同学会の「一切の事」は、「評議員と幹事との協議」によって処理されるようになる¹⁴⁾。服部、鄭、川島は初代評議員となり¹⁵⁾、陸軍通訳官瀬上恕治、正金銀行北京支店員古賀邦彦は幹事として¹⁶⁾、それぞれ学務と庶務を分掌した¹⁷⁾。またその後、服部は清語同学会会長に選任された¹⁸⁾。

服部字之吉は1902年7月に東京帝国大学教授に任じられた。京師大学堂の近代化を図る清国政府が日本にその適任者を求めたのに応じて、日本政府は同年8月、服部を清国政府に推薦したため、服部は、同年秋、京師大学堂師範館正教習として北京へ赴任した¹⁹⁾。清国最高学府の教育近代化という大きなプロジェクトに深く関わり、北京在住日本人の中で中心的な位置にいた服部が、清語同学会会長に就任したということは、この学校が教育機関として重視されるようになったことを意味するであろう。

清語同学会は、1905年11月、小村寿太郎全権大使が北京を訪れた際、500円を寄付したため、これを基金とした²⁰⁾。また、1907年時点では、授業料（月額3.5元）及び「有志者」からの寄付金によって運営されていたが²¹⁾、1910年時点では、評議員からの寄付金制度が廃止され、日本駐北京公使館からの補助奨励金が給付されるようになった²²⁾。正確な時期は不明だが、1907年から1910年までの間に、清語同学会は公使館との結び付きが深まり、公使館補助奨励金制度が導入されるようになったと思われる。また公使館補助奨励金の他に、民間企業から寄付されることもあった²³⁾。

このように支那語研究舎は、そのもともとの成り立ちは東京外国語学校出身者が恩師金国璞の養老金捻出という私的目的のために金国璞の自宅で開いた中国語塾に過ぎなかったが、1905年11月、清語同学会に改称されてからは、評議員と幹事が設けられ、評議員には服部をはじめとする重要人物が名前を列ねる民間組織へと変身した。また日本公使館と

の関係も深まり、清語同学会に関する重要事項を議定する際には、日本公使館関係者が常に参与し、やがて公使館補助奨励金を給付されるようにもなった。このような変化が生じた原因については、現存の史料では明確に言及されていないが、日露戦争の際、「従軍した」支那語研究舎の出身者が「甚だ多」く、また「清國各地に在て政治、教育、實業其他の方面に活動しつつあるもの」が「頗る多」くなってきたため²⁴⁾、支那語研究舎の存在価値が高まったこと、さらに外務省や三井物産のような大手企業の留学生も就学するようになり私塾では対応できなくなったことなどがきっかけとなり、支那語研究舎がより組織化された清語同学会へと変貌したのではないかと考える。

清語同学会では、1908年以降三回に亘り、改革発展を目指す大きな動きがおきた。

第一回目の改革は、1908年2月である。2月19日、清語同学会総会が開かれ、同学会関係者は日本人会責任者と相談して、清語同学会改正規則を議定した。規則改正の目的は、清語同学会の発展策を講じることで、現時点の状況に満足せず、基礎を固めた上で、「拡張整頓」を計ろうとした²⁵⁾。

規則改正後の清語同学会会員の学習状況は、次のようであった。入会は随時可能。学生はレベルによって3クラスに分けられ、月曜から土曜まで毎晩7時から9時まで授業を受ける。中国人教習は金国璞総教習の他に恩教習、栄教習の2名、日本人教習は公使館書記生西田畀一の1名である。金総教習は『談論新編』、『官話指南』、『語言合璧』、恩教習は『北京紀聞』、『華言問答』、『華語跬歩』を用いて授業をおこない、栄教習は尺牘と書取り、西田教習は文法と訳読を担当した²⁶⁾。中国人教習の教授法は教科書の素読が主流である。通常の授業の他に、服部宇之吉、鄭永邦及び京師法政学堂総教習巖谷孫蔵、京師大学堂教習杉栄三郎などの「知名の士」を招いて、毎週1回講演会を開き、清国事情などを紹介した²⁷⁾。1908年3月時点で、清語同学会会員は20数名、内寄宿会員は10名（外務省、三井物産会社、川崎造船所などの語学留学生）であった²⁸⁾。

当時の清語同学会には教室が3つあったが、「教室らしき教室は一もない」。また10人収容の寄宿舎を設けたが、「何等の設備もない、桌子椅子寝臺夜具暖爐洋燈洗面器食器一切寄宿生の自辨である、屋瓦が落ち窓戸破れ、まるで廢寺に宿れる心地」である²⁹⁾。清語同学会は寄宿舎に対して一切干渉せず、寄宿舎生は自己管理の下で日々を送っていた。朝食の前後より、各自の語学稽古が始まり、会話、時文、尺牘、官報、戯曲、小説など

「思い思いに研究する」。朝食後、中国人教師を聘して、2時間乃至4時間の個人レッスンを受け、夜は同学会の授業を受けた³⁰⁾。勉強の合間に、列車での日帰り旅行、船での遊覧、玉泉山への雪中遠足、スポーツ大会などを楽しんだ。

第二回目の改革の動きは、1908年末に持ち上がった。上海東亜同文会会長・鍋島直大は北京を訪れた際、伊集院公使に会い、東亜同文会も支那語、支那事情などの研究機関を北京で設立したい、可能であれば清語同学会を基にしたい、という意向を伝えた。伊集院公使は立派な研究所さえ設立できれば結構なことだと賛同の意を表したが³¹⁾、この計画は実現には至らなかった。ちょうど同じ頃、服部は帰国のため、会長を辞任することになった。1908年12月25日に評議員会が開かれ、巖谷孫蔵が後任会長に選出された³²⁾。1909年夏、三井物産の会員が満期退学したため、一時的に人数が減ったが、南満鉄道の留学生8名などの入会により、在学者数も依然20数名を維持し、授業の時間や内容なども変わらなかった³³⁾。

第三回目の改革は、1910年3月から1911年7月にかけて断続的におきた。1910年3月16日、清語同学会評議委員会が開かれ、清語同学会発展のための「拡張大計画」案を作成することが決定した³⁴⁾。4月30日、北京日本人会及び日本人商工会主催の日本実業団歓迎会の席上、伊集院公使は自ら北京における清語研究機構設立の必要性を訴えた³⁵⁾。1910年末、清語同学会の「振興案」は、会長巖谷孫蔵により作られ、評議委員会でも承認され、伊集院公使の後援者としての承認を得て、実行しようとした際、1911年1月中旬満州で発生したペストは北京にも拡がり、北京は大混乱に陥った。日本人会は「臨時衛生委員会」を設立し、隔離所も設置した³⁶⁾。日本人に対する一時帰国勧告も出され、北京各会の活動は続々休止に追い込まれた。「平上去入生（筆名）」は当時の様子について、「日夕の警報午織るに似て、京師一帯地の戒厳、兵馬倥傯の際よりも密なり、之が爲に、凡そ事業の眉睫に迫らざるものは、一切擧げて之を閑地に移すの已むなきに至り、學會振興案の如きも亦柵に戻れる蟲籠の運命となり果てて、西郊雨露の秋までは、再び話に上らぬ [ママ] ざらめと悲観せし人士も少なからざりし」³⁷⁾と書いているが、このペスト騒動で、清語同学会の「振興案」は暗礁に乗り上げてしまったのである。

この困難な局面を打開したのは、公使館二等書記官鄭永邦³⁸⁾であった。鄭永邦は1896年3月に北京公使館に赴任し、支那語研究舎を創設期からずっと積極的に支援していた。1906年4月、英国転勤のために北京から離れたが、1911年5月17日、再び北京公使館に戻った。「平上去入生」は、北京に戻った鄭永邦について、「同氏の來燕は正に是れ同學會振興案の一警策として特筆すべきものなるのみならず、學會創立の歴史上、同氏も亦欣然

として該案に對する意見と盡力とを許諾せらるべきは、舊交諸士の齊しく依頼する所にして、諸事すべて同參贊の入燕を待て一氣に辦過する事に定め居たる」³⁹⁾と書いているが、鄭永邦來燕を契機に、清語同学会の改革は再び軌道に乗る。

1911年6月30日、清語同学会臨時評議員会が招集され、会則改正及びその他の重要事項が次のように議定された。

1. 新会則は、清語同学会の目的を「本會は時務を辨識せしむる爲め實求を旨とし、清國の語言並に時文尺牘 [マ] の一斑を教授するを以て目的とす」と定めた⁴⁰⁾。
2. 旧会則ではクラス別に教科書の書目を列挙するのみであったが、新会則では、毎週12時間の授業をおこない、「会話」、「語学講義」、「訳読」、「時文及び訳読」の4科目に分けて、すべてバランスよく実施することが定められた。
3. これまでは中国人教習に教授方法が一任されていたため、素読に片寄っていた。また学業考査法も不完全であった。これらの問題点を是正するために、教頭を任じ、教頭の下で教授方法の統一を図り、学業の進行状態及び成績を厳正に考査することとした。
4. 清國の語学並びに文学に関する公開講習会が開かれることとなった。期間は7月1日より8月31日までの60日間、時間は毎日午前8時より2時間。講習科目は「北京官話」、「華音素読」、「兒女英雄傳鈔本」、「孟子学」、「清朝詩文」で、清語同学会の教習が講義を担当した。
5. 新しい人事が決まった。会長は巖谷孫藏、教頭は鄭永邦、幹事は高尾一等通訳官、幹事兼囑託講師は佐藤経学科大学生、会計監督は吉田書記生、教習は金国璞、榮溥、徐廷炬、楊育忠、評議員は高等警務学堂監督川島、「順天時報」社長亀井、川田病院院長川田、陸軍歩兵大尉町野、「大阪毎日新聞」特派員豊島、高等警務学堂教習浅井、北京郵便局長杉野、横浜正金銀行北京支店長実相寺貞彦、京師大学堂教習杉栄三郎である。京（北京）外評議員も新たに設けられ、服部宇之吉他6名が選任された。なお会長、幹事、会計監督は評議員も兼任する⁴¹⁾。

上述の改革案からは、1、実用を重んじる、2、授業内容を充実させる、3、教授方法を向上させる、4、広く門戸を開き、短期集中学習希望者のニーズにも応える、5、北京在留日本人の主だった面々を評議員に招き、幅広い支援を得る、といった狙いを読み取ることができる。

三 大日本支那語同学会

1912年、清朝崩壊と中華民国成立により、「清語」という呼び方は時代に相応しくなくなったため、清語同学会は大日本支那語同学会と改称された⁴²⁾。中国社会における激しい歴史の変動は、北京滞在の日本人にも大きな変化をもたらした。清国政府に雇われていた日本人教習の殆どは解任され、巖谷孫蔵も京師法政学堂総教習の職の後、中華民国政府の懇請に応じて法典編纂会調査委員、中華民国大総統府法律諮議を歴任、1917年春、病気のため帰国した。鄭永邦は1913年公使館書記官の職を辞し、中華民国政府顧問に聘されるが、病気に罹り、1916年、東京で没した。

清語同学会は、1908年創刊の『燕塵』に比較的詳しい関連記事が掲載されているため、主にこの雑誌をもとに足跡をたどることが可能である。しかし『燕塵』は、1912年に休刊する。1922年に『北京週報』が創刊され、大日本支那語同学会関連の記事が再び掲載されるようになるが、『燕塵』休刊から『北京週報』創刊までの約10年間の状況については、従来、史料不足によりその概況を描くことが困難であった。しかし1921年に丸山昏迷が書いたガイドブック『北京』に、大日本支那語同学会についての比較的詳しい記録が残されている。『北京』によると、大日本支那語同学会は、清語同学会に比べていくつかの変化が現れている。

1. 修業年数は3年と明記され、夜間授業は廃止、昼間に授業をおこなうようになった。
2. 毎週の授業時間は12時間から24時間に増え、授業科目も多くなった。各科目の週間授業時間数は次のように配分されている⁴³⁾。

	発音	官話訳読	時文講義	尺牘講義	会話	書取	作文	通訳	日文漢訳	小説
第1年	6	13			3	2				
第2年		7	9	3	3	1	1			
第3年		3	8	3		1	3	2	2	2

3. 使用教科書の種類も増え、年度別に次のように割り当てられた。第1年『急就篇』、『華語跬歩』、『支那語教科書』、『支那声音字彙』。第2年『談論新篇』、『官話指南』、『北京事情』、『時文粹選』、『共和新尺牘』。第3年『縉紳談論』、『兒女英雄傳』、『動詞分類大全』。
4. 入学金は1元、会費（授業料）は月額3元。新学期は4月からであるが、随時入学

可能。大日本支那語同学会会長は北京日本居留民会会長・中華民國交通部顧問の平井晴二郎、評議員は平井晴二郎、北京日本居留民会副会長・陸軍中將青木宣純他10名、幹事教頭兼会計監督は公使館三等書記官中畑栄、教習は瑞璵、宗蔭、林荘である。

これらの記録を見ると、大日本支那語同学会のカリキュラムや組織構成は整っているかのようだが、実はうまく機能しておらず、専任の校務担当者さえいなかった。1917年3月、かつて清語同学会の幹事と教習をしていた公使館員西田畊一は、7年ぶりに北京に戻り、大日本支那語同学会の校務を兼務した⁴⁴⁾。その後、1919年から1924年にかけて実際の校務を取り仕切ったのは、学生の「総班」（学生会長）である。1919年から1922年まで大日本支那語同学会に在籍した影山巍は、「総班」が「教師の給料から部屋代の支払いや取り立て、さては学生の成績評価までやり、自分が「総班」となったときには、「それまで出していなかった卒業証書の発行を提案し、できるだけ大判の証書に理事や幹事の名を羅列して、べたべたと印鑑を押したものを作ってもらった」⁴⁵⁾と追憶している。

1922年3月、羽泉生は大日本支那語同学会の現状について、「同學會最近の傾向を見るに聊か眞の研究者をして失望せしむるものがある」、「今日では會の目的を没却してゐる同時に之〔カリキュラム——引用者注〕をも取亂すに至つた殊に二班三班に於て甚だしい早く元の如く改正されんことを切望する尚ほ教科書は必ず一定して置く必要がある」と不満を述べ、さらにまた、役員諸氏は会則の第10条から第14条までに規定されている「責務丈でも盡くして欲しい」、「同學會が時勢の要望に適ふどころか却て之逆行しぬ〔ママ〕責任の全部を役員諸氏に負はしめてよい」と役員諸氏の無責任さを厳責し、痛烈な批判をおこなった⁴⁶⁾。

1923年9月1日、大日本支那語同学会は小紗帽胡同より東単三條胡同の旧日本小学校校舎に移転し⁴⁷⁾、小紗帽胡同の元校舎は12人ほど入れる学生寮となった⁴⁸⁾。

1924年、大日本支那語同学会の学生は教授方法、学課科目、教習の無断欠勤に対して不満を持つようになったため、国士館大学派遣留学生で「総班」の武田熙は、学生の要望を役員に提出した。しかし、役員から逆に、「君の好むとおりの組織に作り直してくれ」と依頼されたため、「欠講がちの教習の辞任を求め、従来の良慣行を基礎に、当代の息吹きをふき込ん」だ。「総班」は学生であるにもかかわらず、「同時に校長的実力者」でもあった⁴⁹⁾。

1921年2月、在京青年に中国語、英語及び簿記を授ける北京夜学会が開学した。北京夜学会と比べることにより、大日本支那語同学会の不振ぶりが明らかになる。1922年1

月から1925年6月までの3年半に、北京夜学会は計4回評議員会を開き、予算、会務刷新、教務について議した。いっぽう大日本支那語同学会は評議員会が一度も開催されなかった。同じ時期に、北京夜学会主催の講演会は13回（毎年恒例の夏期講習会の講演を含めると23回）開催されたのに対して、大日本支那語同学会はわずか3回しか開かれなかった。

このように大日本支那語同学会は、運営管理方法、カリキュラム編成、教授方法などの面でいろいろな問題点を抱えていたが、学生は「支那語」と「支那事情」の勉強に打ち込んだ。清水安三は、「同學會の小さい陋い部屋に宿れる青年達は、一人残らず勉強家であつて」、同学会の空気は誰でも入ったら、努力せざるを得なくなり、「息づまる程、勉強に燃えてゐた」と回想している⁵⁰⁾。また武内義雄は、毎日、午前は中国語の「稽古」に従事して、午後は授業がないので読書をしたと追想している⁵¹⁾。

四 北京同学会語学校

北京夜学会開校の余波を受け、大日本支那語同学会は不振に喘ぐようになるが、この行き詰まった状況は両会の合併によって打開された。1925年3月22日、北京夜学会評議員会が開かれ、大日本支那語同学会との合併が決議された。そして北京夜学会の中山龍次、大塚定雄、中野吉三郎、種田徳太郎（のち転勤のため布施知足と交替）、大日本支那語同学会の有野学、田中徳義の6名から構成される合同具体案起草委員会が設立され、新語学校機関会則・校則案が起草された。新語学校機関会則・校則案は5月17日の両会合同評議員会において可決され、5月24日付け『北京週報』に掲載された。両会合併後の新しい会名と学校名は、5月19日より新聞紙上にて、一般在留民からの意見を募った。そして6月2日の両会評議員会の席上、会名は北京同学会、学校名は北京同学会語学校と決定された⁵²⁾。両会合併後の組織には、4つの特徴が見られる。

1. 北京同学会と北京同学会語学校の2つに分離された。北京同学会は北京同学会語学校の経営母体であり、資金調達、語学校の会計監督、校長、教頭及び教師の任命という役割を担う。その他に「専門の學識を有する者又は知名の士に請ひ時々講習會又は講演會を開くこと」もおこなう。北京同学会語学校の役割は、教育業務に専念することで、校長、教頭、教師の職位が置かれた。このような役割分担により、仕事の範囲と責任が明確化された。
2. 北京同学会役員陣は、錚々たる顔ぶれとなっている。役員の数も大幅に増えた。会長は平井晴二郎（北京居留民会会頭、中華民国交通部顧問）、副会長は中山龍次

(中華民国交通部顧問)，会計監督は小林和介(中華匯業銀行専務理事)である。幹事は有野学(北京日本公使館一等通訳官)，布施知足(日本電報通信社北京支社囑託)，大塚定雄(職業不明)，中野吉三郎(支那風物研究会主幹)，飯田鐘三郎(義達洋行行主)，藤原謙兄(極東新信社社長)，田中徳義(横浜正金銀行北京支店副支配人)の7名である。評議員は25名おり，その殆どはマスコミ関係，銀行関係，貿易会社経営者などの実力者である。この他に，毎月一定額を醸出する「維持会員」と一時的に出資する「賛助員」を設けた。また更に書記若干名が置かれ，北京同学会及び北京同学会語学校の事務に従事した。

3. 「学校」という名称を用いた組織北京同学会語学校が誕生した。「従前の謂はば私塾的な組織と異り，純然たる學校制」にしたのである。そのため，天津の日本領事館に正式な申請をして，許可を得た。校長は北京同学会会長平井晴二郎が兼任⁵³⁾，教頭は北京日本公使館一等通訳官有野学が兼務したが，教頭に関しては「学識ある専属の教頭を招聘する計画」をも立てた。
4. 北京同学会語学校は「正科」(3年)と「夜学部」(2年)の2部に分かれた。「正科」は中国語及び中国語関連の学科を，「夜学部」は中国語，英語及び事務関連の学科を教授する。「正科」は入学金5元，授業料月4元，授業時間週24時間，「夜学部」は授業料月2元，授業時間週12時間である。「学校規則」は29箇条からなり，細部に亘って規則が定められているが，その末尾には，「正科」と「夜学校」の暫定時間割が掲載されている⁵⁴⁾。

	正科										
	発音	訳読	会話	書取	作文	通訳	時文	尺牘	小説	経書	
第1年	1	18	1	2	2						
第2年		10	3	3	2	2	2	2			
第3年		7	3	2	2	2	2	2	2	2	

	夜学校		
	支那語	英語	簿記
第1年	6	5	1
第2年	5	6	1

北京同学会語学校は当初，年齢，性別，学歴，国籍の制限がなかったため，帝国大学，高等商業学校，外国語学校支那語科などを卒業した高学歴の人もいれば⁵⁵⁾，ごく普通の

庶民もいた。また北京語の上達のために入学する中国人さえもいた⁵⁶⁾。中国語学習の志願者であれば、レベルを問わず誰でも入学できるため、学生の構成は千差万別であった。これは支那語研究舎創立以来ずっと維持してきた基本方針であったが、学校側はこの方針を貫くために、様々なレベルの学習者に飛び級制を以て柔軟に対応した。

北京同学会語学校は、1925年、「日本に於ける外国語学校又は上海同文書院卒業生程度位を、磨きにかける」という高らかな目標を掲げて⁵⁷⁾、新たな一步を踏み出すが、その道のりは順風満帆ではなかった。のちに中国関係の随筆を多数執筆し、『西遊記』、『三国志』などの翻訳もおこなった村上知行は、1928年頃、北京同学会語学校の夜間部に入学する。夜間部の学生は10名足らずだったが、その中に、博多出身の北京日本人小学校教師がいた。中国語教員の趙は、明治大学卒業生で日本語がかなり上手だった。村上知行は『北京十年』の中で、夜間部の授業風景を次のように活写している。

私達が使用した教科書は、当時の標準的華語入門書だつた宮島大八氏の『急就篇』であるが、それも始めは兎も角、少し進んでむつかしくなると、^{くだん}件の博多先生、ブツブツ文句を言ひ出した。たとへば『您請吃煙罷』などといふ言葉が出てくると、先生の^{きた}バツテン言葉で^{まね}鍛へた舌では、どうも^{まね}真似が出来ない。

『Nin ching chih ien pa!』

と趙さんが讀む。

『Ning ching chi yen ba!』

と、それにつれて博多先生が、額に^{あぶらあせ}脂汗を^{にじ}滲ませながら、口を^{たてよこ}縦横十文字に動かして言ふ。

『Ning ぢやありません。Nin です。』

『Ning……』

『いけません、矢張り Ning になつてゐます。それから chih……chi ぢやありません。Chih です。舌を捲いて發音してごらんなさい。』

『Chu……。』

『Chu ぢやない、chih……。』

『Chi……。』

『Chih……。』

『そげん言はつしやるばつて、出来まつせんばい。Chi でよござつせうが！同じことですばい。』

『いや、同じぢやありません。違ひます。』

『どこが違つとりますな？』

『Chih と chi ぢや大變違ひます。』

『そりや違つとりませうばつて、そげん^{ちが}矢釜^{やかまし}敷かこたア出来まつせんたい。まけといてつかアさいや。よござつせうが……。先生も日本人に都合^{つがふ}よかごと教へなさつせん^{にく}と、憎まれさつしやるばい。どだい、この意味はどげなことですかいな？』

『どうぞ煙草をおあがり下さいといふ意味です。』

『そげなことですかい！ 煙^{けむり}と書いて、煙草^{たばこ}のことですばいな！』

『ええ、さうです。』

『ぢや、煙^{けむり}のことは何と言ひますとな？』

『矢張り煙^{けむり}です。』

『煙^{けむり}と煙草^{たばこ}と同じぢや、間違ひまつせうもん。そげな不都合なことがござつせうか！
ハッキリ區別しときなさす方がよござすばい。』

ざつと斯う言つたお喋^{しゃべ}りが、毎晩のやうに反覆されて、少くとも三十分や四十分を空費する。到頭私は我慢しかね、一週間ばかり経つて止めて仕舞つた⁵⁸⁾。

「博多先生」と「趙さん」との何とも珍妙なやりとりに思わず腹を抱えて笑ってしまうが、このような授業を続けていては、中国語の上達はおぼつかない。村上知行はこの時期の北京同学会語学校について、「当時は萎靡して揮はざりし絶頂」だったと書いている⁵⁹⁾。

1925年の統計によると⁶⁰⁾、北京における日本語学校は北京日語学校⁶¹⁾が1校存在するのみであった。そこで北京同学会語学校は、1928年、従来の華語班に加えて、新たに日語班を設置した。1931年、校則改正がおこなわれ、華語班正科の修学年限は3年から2年へ変更、その代わりに修学年限1年の研究科が設けられた。また日語班は初級クラス（修学期間3ヶ月）と上級クラス（修学期間6ヶ月）が設置され、それぞれ月曜日から金曜日まで毎日夕方2時間の授業をおこなった⁶²⁾。1932年、華語班は補習科を増設し、中国語の発音と簡易会話の授業を実施した。この時期は、辻野朔次郎が北京同学会会長と北京同学会語学校校長を兼任した。また国立清華大学教授銭稻孫と国立北京大学教授周作人は、華語班正科及び研究科の名誉講師として招かれた⁶³⁾。

1931年頃の学校経営はかなり厳しい状態であつたらしく、外務省東方文化事業部に提出した日語班補助金申請書類には、「近来世界的不景氣ノ影響ト在留邦人ノ減少ニヨリ寄付金激減シ同校華語科ノ維持スラ困難ナル狀況ニ陥リ乍遺憾日語班ニ充分ノ經費ヲ裂ク余

裕無ク該科講師等ノ義侠的支持ニヨリテ継続致居候」⁶⁴⁾という窮状を訴える文面が書かれている。その後1932年4月と1934年4月の2回に亘り、外務省文化事業部から日語班に1000円の補助金が与えられた。

1934年3月、外務省は、「内地ノ支那語専門学校卒業者及貴地在留ノ留学生ヲシテ支那語ヲ精練セシムル機関」として、学校の内容を改善し、現在より程度の高い学部を設けるように指示を下した⁶⁵⁾。同年5月、北京同学会語学校は「学校内容改善拡張案」を外務省に提出、外務省の指示に合わせた形で、華語部と日語部の設置を提案し、また支那語研究舎創設以来一度も定められたことのなかった入学資格を定めた⁶⁶⁾。同年12月、外務省文化事業部より校舎拡張助成金として銀25000元が給付されたため、1935年4月、小羊毛胡同にある敷地1300坪、建物167坪の校舎に移転した⁶⁷⁾。外務省が北京同学会語学校に対してこのように手厚い援助をおこなった背景には、1931年の満州事変勃発によって、日本の中国侵出が本格化したことがあると思われる。日本は、占領地支配を強固なものにするために、また占領地を拡大するために、中国語に堪能な日本人、日本語ができる中国人を育成することが急務となった。北京同学会語学校の1926年在籍者数は69名（正科39名、夜学30名）だったが⁶⁸⁾、1934年末には華語班129名、日語班60名という規模にまで拡大した⁶⁹⁾。

北京同学会語学校は、1939年、日中戦争の拡大・激化に伴い、対中国戦に必要な人材の確保に迫られたため、所管が在北京日本大使館から興亜院華北連絡部文化局へと移され、校名も北京興亜学院へと改称された。

おわりに

本稿では、1903年金国璞の自宅で産声を上げた小さな語学塾支那語研究舎が、清語同学会、大日本支那語同学会、北京同学会語学校と名称を変えつつ、1939年、北京興亜学院へと生まれ変わるまでの紆余曲折に満ちた変遷の様子をたどり、各学校の実態について考察した。

前述したように、支那語研究舎時代から北京同学会語学校時代に至るまで、当時の北京でそれぞれの地位で重きをなし、活躍していた服部宇之吉、川島浪速、巖谷孫蔵、平井晴二郎、中山龍次などの人物が、評議員、会長、校長などの立場からこの学校の運営に深く関与した。またこの学校で中国語を学ぶことで、後年の優れた学者としての道を切り拓いた人物として、元曲の研究などで著名な中国文学者・塩谷温がいる。塩谷は、青年時代2

度中国へ行き、それぞれ支那語研究舎と清語同学会に在籍した。また論中、名前を挙げた桜美林学園創立者・清水安三、老子の研究などで名高い中国哲学者・武内義雄は、大日本支那語同学会で学んだ人たちなのである。これまで、外地における中国語教育という研究領域において、支那語研究舎とその後身の清語同学会、大日本支那語同学会、北京同学会語学校はほとんど注目されてこなかった。しかし支那語研究舎は、北京において最長の歴史を誇る日本人対象の語学学校であり、また関係者、在籍者の中には見たごとく少なからぬ著名人がいることにも目を向け、本稿では諸文献に散見する関連記事を探し出し、極力その学校史の変遷の実態に迫ることに努めた。

1939年、北京同学会語学校は北京興亜学院へと改称され、「從來ノ支那語及支那事情ノ専科教育機關」から「興亞ノ指導者タリ將來北支諸般ノ實務ヲ擔當ス可キ青年ノ養成機關」、すなわち国益のために占領地で活躍できる人材を育成する「國策的教育機關」へと変貌した⁷⁰⁾。そして終戦間際の1944年には、北京経済専門学校へと改称され、「語学」だけでなく「経済」にも力を入れた学校になった。こうした北京興亜学院、北京経済専門学校の実態については、後日、別の機会を持って論ずることとする。

注

- 1) 六角恒廣『中国語教育史の研究』、東方書店、1988年、p.200。
- 2) 1901年、北京で東文学社清語研究所が創設されるが、1907年頃、事実上の閉鎖に追い込まれた。大正時代には、北京で3つの中国語学校が誕生した。1917年5月、三菱書院と三井書院が開校するが、これは会社内部の社員教育に限定した中国語教室である。1921年2月、北京夜学会が設立されるが、1925年6月、支那語研究舎の後身である北京同学会語学校と合併した。
- 3) 支那語研究舎創設の動機については、拙論「『支那語研究舎』創設の動機をめぐって」(『学習院女子大学紀要』第9号、2007年)を参照のこと。
- 4) 井上翠『松濤自述』、大阪外国語大学中国研究会、1950年、p.9。
- 5) 燕客寒生「北京清語同學會」、『燕塵』第3号、1908年3月20日、p.49。
- 6) 清末から民国にかけて学務顧問あるいは教師として学校教育に携わる人を教習と呼んだ。
- 7) 淡水「北京清語同学会」、那須清編『北京同学会の回想』、不二出版、1995年、p.103、初出『同学』第2年第1号、1910年9月。
- 8) 牛後生「燕京回顧録」、『燕塵』第3年第1号、1910年1月1日、p.21。
- 9) 淡水「北京清語同学会」、那須清編『北京同学会の回想』、不二出版、1995年、p.103、初出『同学』第2年第1号、1910年9月。
- 10) 燕客寒生「北京清語同學會」、『燕塵』第3号、1908年3月20日、p.49。
- 11) 「北京同學會語學校概覽・昭和七年」、六角恒廣編『中国語教本類集成』第10集第3巻、不二出版、1998年、p.197。
- 12) 鶏口生「爐邊漫筆(二)」、『燕塵』第3年第3号、1910年3月1日、p.23。

- 13) 不倒菴「燕京だより」, 『燕塵』第1号, 1908年1月20日, p.36。
- 14) 清國駐屯軍司令部編纂『北京誌』, 1908年, p.311。
- 15) 同上, p.311。
- 16) 淡水「北京清語同学会」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, p.103, 初出『同
学』第2年第1号, 1910年9月。
- 17) 鶏口生「爐邊漫筆(一)」, 『燕塵』第3年第2号, 1910年2月1日, p.22。
- 18) 1908年発行清國駐屯軍司令部編纂『北京誌』によると, 清語同学会は1907年7月まで会長が置
かれていなかった。したがって服部宇之吉が清語同学会会長に就任するのは, 1907年7月から帰
国が決まった1908年年末までの間であるが, 正確な時期は不明。
- 19) 竹田復ほか「先學を語る——服部宇之吉博士——」, 『東方学』第46輯, 1973年7月, p.164。「服
部宇之吉略年譜」, 『東方学』第46輯, 1973年7月, p.185。
- 20) 清國駐屯軍司令部編纂『北京誌』, 1908年, p.312。
- 21) 同上, p.312。
- 22) 鶏口生「爐邊漫筆(一)」, 『燕塵』第3年第2号, 1910年2月1日, p.23。
- 23) 不倒菴「燕京だより」(『燕塵』第8号, 1908年8月31日, p.44)によると, 1908年8月, 松
方幸次郎は「清語同学会」に「川崎造船所留學生三名寄宿し居れるを以て同會基金に銀百弗を寄
附」した。
- 24) 燕客寒生「北京清語同學會」, 『燕塵』第3号, 1908年3月20日, p.49。
- 25) 同上, p.49。
- 26) 同上, p.49。
- 27) 清國駐屯軍司令部編纂『北京誌』, 1908年, p.312。
- 28) 燕客寒生「北京清語同學會」, 『燕塵』第3号, 1908年3月20日, p.49。
- 29) 鶏口生「爐邊漫筆(一)」, 『燕塵』第3年第2号, 1910年2月1日, p.24。
- 30) 鶏口生「爐邊漫筆(二)」, 『燕塵』第3年第3号, 1910年3月1日, p.22, p.25。
- 31) 淡水「北京清語同学会」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, p.104, 初出『同
学』第2年第1号, 1910年9月。
- 32) 不倒菴「燕京だより」, 『燕塵』第2年第2号, 1909年2月1日, p.27。
- 33) 鶏口生「爐邊漫筆(一)」, 『燕塵』第3年第2号, 1910年2月1日, pp.22-23。
- 34) 蓑蟲菴「北京通信」, 『燕塵』第3年第4号, 1910年4月1日, p.43。
- 35) 蓑蟲菴「北京通信」, 『燕塵』第3年第6号, 1910年6月1日, p.50。
- 36) 「鼠疫彙報」, 『燕塵』第4年第2号, 1911年2月11日, p.36。
- 37) 平上去入生「清語同學會の近況(上)」, 『燕塵』第4年第7号, 1911年7月31日, p.32。
- 38) 鄭永邦は1862年生まれ。明治時代日清外交の舞台で日本側通訳として大活躍していた鄭永寧の
次男である。旧東京外国語学校卒業後, 外交官の道を歩み始めた。中国語に堪能で, 当時の日本
人の中では「北に鄭あり南に御幡あり」(六角恒廣『漢語師家伝・中国語教育の先人たち』, 東方
書店, 1999年, p.128)といわれるほど, 「支那語通譯官としては無雙の譽があつた」(東亜同文会
編『対支回顧録』(下), 原書房, 1968年, p.37)。『官話指南』(吳啓太との共著), 『日漢英語言合璧』,
『日清英露四語合璧』(いずれも吳大五郎との共著)などの語学関係著作がある。
- 39) 平上去入生「清語同學會の近況(上)」, 『燕塵』第4年第7号, 1911年7月31日, p.32。

- 40) 旧会則において清語同学会の目的がどのように定められていたかは不明である。
- 41) 平上去入生「清語同學會の近況(上)」, 『燕塵』第4年第7号, 1911年7月31日, pp.32-33。
- 42) 「北京同學會語學校概覽・昭和七年」, 六角恒廣編『中国語教本類集成』第10集第3巻, 不二出版, 1998年, p.197。
- 43) 丸山昏迷『北京』, 1921年, pp.363-364。『北京週報』(1922年3月26日)にも, 各学年の各科目授業時間配分が掲載されているが, 内容が若干異なる。しかし, 授業時間が週24時間であることは一致している。
- 44) 那須清は「支那語研究舎——北京にあった無名の中国語学校」(『北九州大学外国語学部紀要』第61号, 1987年11月)の中で, 1912年清語同学会が大日本支那語同学会へと改称されたころ, 西田畀一が校務に従事していたと書いている。しかし, 布衣尊「西田畀一氏」(『北京週報』第43号, 1922年12月3日, p.28)によると, 西田は, 1910年3月, 奉天領事館へと転任し, その後上海領事館に赴いた。そして, 1917年, 再び通訳官として北京に戻り, 大日本支那語同学会の校務を兼務する。1912年から1916年までの校務担当者は不明である。
- 45) 那須清「支那語研究舎——北京にあった無名の中国語学校」(『北九州大学外国語学部紀要』第61号, 1987年11月, p.31)。
- 46) 羽泉生「日支語同學會」, 『北京週報』第10号, 1922年3月26日, p.29。
- 47) 「京津だより」, 『北京週報』第79号, 1923年9月9日, p.32。
- 48) 武田熙「思い出のアレコレ——天を衝いた往年の意気」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, p.113。初出『燕京同学会会報』, 1962年8月。
- 49) 同上, p.114。
- 50) 清水安三『朝陽門外』, 朝日新聞社, 1939年, pp.100-101。
- 51) 武内義雄「学究生活の思い出」, 『思想』375号, 岩波書店, 1955年, p.89。
- 52) 「『北京同學會』の成立」, 『北京週報』第163号, 1925年6月7日, p.17。
- 53) 1926年6月, 平井晴二郎が死去。1927年4月, 北京同学会副会長中山龍次が会長に就任し, 国民政府交通部顧問, 北京居留民会役員辻野朔次郎が北京同学会語学校校長に就任した。
- 54) 「同學會夜學會の合同」, 『北京週報』第162号, 1925年5月24日, pp.24-26及び「『北京同學會』の成立」, 『北京週報』第163号, 1925年6月7日, p.17。
- 55) 中山龍次「語學校の設立に就て」, 『北京週報』第165号, 1925年6月21日, p.18。
- 56) 武田熙「思い出のアレコレ——天を衝いた往年の意気」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, p.113。初出『燕京同学会会報』, 1962年8月。
- 57) 「燕京野史」, 『北京週報』第161号, 1925年5月17日, p.5。
- 58) 村上知行『北京十年』, 中央公論社, 1942年, pp.52-54。
- 59) 同上, p.55。
- 60) 北京満鉄公所研究室「中華民国教育概況一覧表」, 『北京満鉄月報』特刊第11号, 1926年, p.22。
- 61) 丸山昏迷『北京』(1921年, p.132)によると, 北京日語学校は1919年3月開校した。
- 62) 「北京同学会語学校校則」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, pp.27-32。
- 63) 「北京同學會語學校概覽・昭和七年」, 六角恒廣編『中国語教本類集成』第10集第3巻, 不二出版, 1998年, p.200。
- 64) 「日語科改革拡張ニ就キ補助金御下附方請願ニ係ル件」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版,

支那語研究舎の変遷及びその実態

1995年, p.33。

- 65) 「北京同学会語学校々舎拡張ニ関スル件」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, p.34。
- 66) 「北京同学会語学校内容改善拡張案」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, p.35。
- 67) 「北京同學會語學校概覽・昭和十年度」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, p.189。
- 68) 「北京同学会沿革略」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, p.10。
- 69) 「北京同學會語學校概覽・昭和十年度」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, p.189。
- 70) 「北京興亞學院一覽・昭和十五年」, 那須清編『北京同学会の回想』, 不二出版, 1995年, p.220。